

大阪・大坂城跡(3)

1 所在地

一 大阪市中央区森ノ宮中央二丁目、二 大手前四丁目、三 谷町三丁目、四 谷町二丁目、五 内本町二丁目、六 徳井町二丁目、七 天満橋京町二丁目、八 北浜東二丁目

2 調査期間

一・三一九八九年(平一)一〇月、二一九八八年(昭63)四月〜一〇月、四一九八九年三月〜四月、五一九八九年五月〜七月、六一九八九年六月〜八月、七一九八八年四月〜五月、八一九八九年二月〜三月

3 発掘機関

財大阪市文化財協会

4 調査担当者

一 宮本佐知子 二 森毅・南秀雄 三・七 黒田慶一 四 藤田幸夫・西畑佳恵 五 鈴木秀典 六 伊藤純 八 松尾信裕

5 遺跡の種類

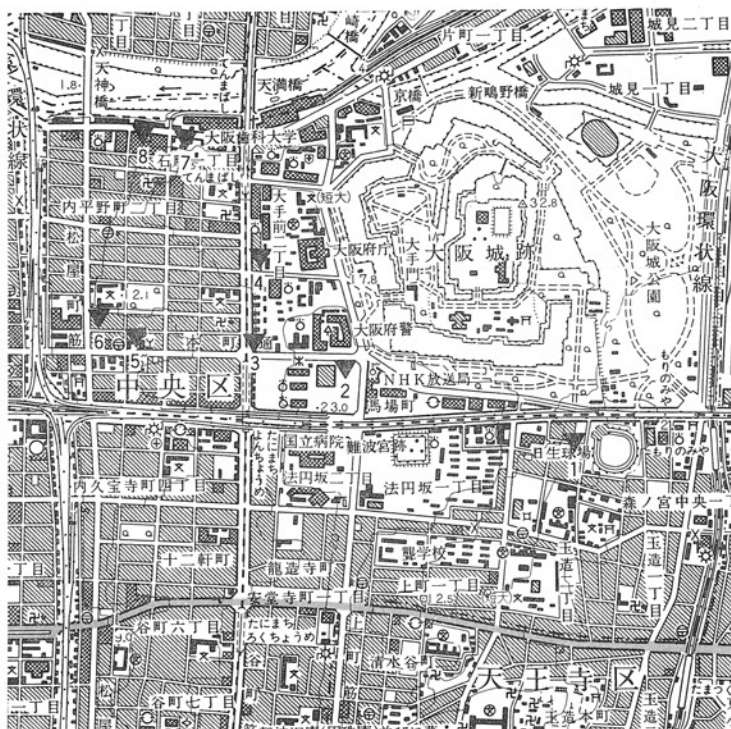
城郭跡・城下町跡

6 遺跡の年代

桃山時代〜江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八九年度の調査で木簡が出土した調査は六件である。この内、二件については未整理のため、残り四件と一九八八年度の調査では



(大阪東北部二万五千分の一)

あるが、未報告であった四件を合わせて報告したい。

一 江戸時代与力同心屋敷跡(OS八九―八九次調査)

調査地は豊臣氏大坂城では三の丸内、徳川氏大坂城では与力同心屋敷に相当する場所である。木簡は機械掘削の残土処理中に出土し

たため、時期を明確にできないが、周辺部で江戸時代の小土坑などが検出されており、江戸時代の可能性がよい。

二 江戸時代城代家臣屋敷跡 (NW八八―一次調査)

調査地は、八七年より三箇年の計画で発掘調査が行われ、五世紀代的大型倉庫群・前期難波宮の「大蔵」とも推定されている倉庫官衙・豊臣氏大坂城の大名屋敷と三の丸の遺構などが重複して見つかっている場所で、江戸時代には、大坂城のすぐ西南に当たる大坂城代の家臣屋敷になっている。報告の木製遺物は、この城代家臣屋敷の裏手になると推定される場所にある長辺一・一m、短辺四m、深さ三mの土坑より出土した。この土坑は、最終的にはゴミが投棄されて埋まっており、一九世紀前半から中頃の多量の陶磁器に加えて、ワインボトルや筭等のガラス製品も伴出した。

周辺の屋敷群は、当時「五軒屋敷」と呼ばれており、それぞれ七〇〇～八〇〇坪程度の敷地を有し、城代配下の中堅から上級の武士たちが居住していたと考えられる。墨書のある木製遺物を出土した土坑のある屋敷地では、建物などは検出していないが、この西約一〇〇mでは、文久三年(一八六三)の大火で焼失したと推定される「五軒屋敷」の建物群などが見つかっている。

(2)の木札と(3)の蒸籠に書かれた「穂積」は同一人物で、天保四年(一八三三)頃、調査地の場所に住んでいたと考えられる。穂積喜左衛門は三河吉田藩の藩士で、天保二―五年の間、大坂城代を務めた

藩主松平伊豆守信順にしたがって大坂に来ている。このことは、『浪華御役録』(大阪城天守閣蔵)という役人リストにも記載されているが、これらの木製遺物によって、居住した屋敷の場所まで特定できるようになった。吉田藩の家臣の役職を記録した「従古代役人以上寄帳」によれば、天保四年当時の穂積喜左衛門は八代目の英彦であったと考えられる。

(4)の蓋に書かれている「三九郎」、(5)の「嘉清」なる人物についてはよくわからない。

三 豊臣氏大坂城跡 (OS八九―九〇次調査)

本調査は地下鉄谷町四丁目駅の新出口建設に伴うもので、現在の谷町筋の東側歩道を調査地とする。谷町筋は岡本良一氏によって豊臣氏大坂城の三の丸の西外郭ラインに比定されている。現道路下約二・五mで厚さ一〇～二〇cmの炭層(雨水などで移動し再堆積したもの)が検出された。木簡三点はこの炭層からの出土で、共伴遺物として一六世紀末以前の陶磁器片と墨書木製品一点、本層によって埋められた土坑から金箔押瓦が出土している。また、本層上面に厚さ二〇cm以上の整地土が盛られ、その整地層を掘り込んで西面する南北石列が設けられている。

四 豊臣氏大坂城跡 (OS八八―一二次調査)

調査地は豊臣氏大坂城の推定三の丸に当たる、谷町筋に面した場所である。三の丸は秀吉没年の慶長三年(一五九八)に築造されたも

のであり、三の丸造成を境として町屋が武家地に変化する例が多く確認されている地域である。

調査では、慶長二〇年（二六二五）の大坂夏の陣によって形成されたと考えられる焼土層より下で、二面の遺構面を確認した。木簡が出土したのは、その下層遺構からである。検出された遺構は一辺約二mの不整形の土坑群でいずれもゴミ穴と考えられる。その内の一つから多量の木製品・陶磁器・鋳型などに伴って木簡が出土した。共伴する陶磁器の年代観から、木簡は三の丸造成以前のものと考えられる。

五 徳川氏大坂城下町屋跡（OS八九—一九次調査）

調査地は江戸時代に最も栄えた通りの一つである本町通りに面している。(1)の荷札は豊臣氏大坂城期（二六世紀末）の土坑から出土した。(2)は一八世紀初めごろの陶磁器と共にゴミ穴から、(3)も同時期の多量の陶磁器と共に井戸から出土した。(2)(3)は出土位置や共伴した遺物から、富裕な町人の屋敷で使用されたものと考えられる。これらは木釘の孔などから浅い箱状の道具の一部で、(2)は蓋板もしくは底板、(3)は側板とみられる。両者は大きさなどから別個体の一部と判断できる。生玉大明神は現在、天王寺区生玉町にある生国魂（いぐくにたま）神社のことである。この神社は『日本書紀』『延喜式』にも記載があり、中世以前は現大阪城付近に鎮座していたといわれている。

六 徳川氏大坂城下町屋跡（OS八九—四一二次調査）

木簡は大坂夏の陣（二六二五）以降に整地された地層を掘り込んでつくられた井戸（深さ三・五m）の埋土から出土した。出土した遺物から江戸時代前半（一七世紀中～後半）に埋められたものと思われる。この木簡は付札で、表には荷の名称と量を記し、裏には納入者の名前を記している。

また、図に示したような木製の定規も出土した。遺存している部分の目盛りは、一二cm強を四分割し、さらにそれぞれを二分割している。「X」印は、この定規の中心を示す印と思われる。曲尺の一寸を基準とした定規であろう。

七 豊臣氏大坂城跡（OS八八—八次調査）

調査地は大川南岸の土佐堀通に面した南側で、豊臣氏大坂城惣構内に位置する。大坂城築城以前の調査地の旧地形は、南から北へ高低差二m程で緩かに傾斜する砂堆の北端であった。砂堆北の落ち込みを、ある時期に平坦に整地している。出土木簡の大半はこの落ち込み埋土から出土した。また、整地以前にこの落ち込みの傾斜面には、上端幅四m、下端幅一m、深さ一・三mほどの素掘りの南北溝SD一二があり、この溝埋土から出土した木簡もある(9)~(12)。また、砂堆上の整地層からも(13)の木簡が出土している。これらの木簡を含む整地層上面には南北五間、東西五間以上の東西棟の礎石建物が存在し、大坂夏の陣で被災したようで、厚さ二〇cm前後の焼土層で覆

われていた。落込み内の整地層からは、漆器碗や下駄・櫛・箸・桶、石製の五輪塔笠部、青花・李朝白磁碗、志野・瀬戸・美濃・備前・丹波・信楽・唐津などの陶磁器が伴出した。

八 豊臣氏大坂城跡（OS八八一―一三三調査）

調査地は上町台地の北端に位置し、大川にむかって傾斜する斜面の先端に立地する。北には土佐堀通が横切り、その北は大川である。南には丘陵の末端に築かれた石垣が続く。

調査地は豊臣氏大坂城の惣構の境界線付近にあたる。惣構がその北限を大川とするか、この調査地の南に続く石垣とするかは未だ定説はないが、ここでは京街道である土佐堀通を城内には含めないとする考えをとって調査地が惣構の外に位置すると判断しておく。また、調査地の性格としては惣構外に位置すること、奥行きが短いことなどから京街道に面した町屋ではないかと推定される。

木簡は大坂夏の陣で焼亡した地表面を形成する整地層より下位の土坑内から出土した。土坑の規模は、狭小なトレンチ調査のため不明である。共伴資料としては美濃・瀬戸の大窯編年のⅢ期、Ⅴ期の天目碗・灰釉皿が多量に含まれている。この他に、軟質施釉陶器、明の瑠璃釉碗・染付碗などが出土しているが、志野焼や唐津焼は出土していない。これらをもって、天正十一年（一五八三）〜慶長初年に属する一括資料と考えている。

8 木簡の釈文・内容

一 OS八九一八九調査

(1) ・「^{〔西カ〕}〇〇セ□村」

・「〽助左衛門尉」 95×22×4 033

二 NW八八一一次調査

(1) ・「〇り一」

・「〇り一」 75×75×13 061

(2) 「三州

○吉田家中穂積喜左衛門^{〔荷カ〕}□物○」

353×93×13 061

(3) 「天保四癸巳年六月中旬 穂積」

(竪)180×80×3 061

(4) 「^〇□□

□村

□一人三州吉田村

打 ○

□三九郎めひ代

天保四年巳七月

東方吉日

(竪)155×158×9 061

(5)

嘉清
茶十籠

(175) \times (38) \times 3 081

三 OS八九—九〇次調査

(1) ・「□」兵衛殿 伝兵衛
・「く七郎 こちまなすし」

180×22×2 033

(2) 「くぐりぬぐ」・「くぐりぬぐ」

・「くちあちけ」

151×23×2 033

(3)

・く トイノ内

三十□入

卯月廿一日

124×24×3 033

四 OS八八—一二次調査

(1) ☐ 吉 ☐ わ ☐ や新五殿

• 二〇〇〇年〇〇月〇〇日

149×24×5 032

五 O S 八九—一九次調査

(1)

長	□	□	三斗
村	□	□	
	□	□	

五郎市二郎

(132) $\times 25 \times 4$ 059

(2) 「○生玉大明神○」

172×105×3 061

(3)

様□神明大玉

〔様力〕☐

$$25 \times (175) \times 7 \quad 061$$

六 OS八九—四一次調査

(1) \square
 \square
 \square
 \square
 \square

札百
〔枚〕

・
天
や

〔満力〕☐

72×52×5 061

七 OS八八―八次調査

北部落込み埋土

(1) ・「 \vee 」□

・「 \vee 」□兵衛

(118)×20×4 039

(2) ・「 \vee 」久兵衛

・「 \vee 」久兵衛

105×13×4.5 033

(3) ・「 \vee 」□

・「 \vee 」□

113×19×2 033

(4) ・「 \vee 」柿二わ

・「 \vee 」林猪

(65)×24×2 039

(5)～(8)は判読不能(図版参照)。

SD二二

(9) 「 \vee 」□

「 \vee 」□

101×101×5 061

(10) ・「 \vee 」□「 \vee 」

・「 \vee 」□

104×20×6 032

(11) ・「 \vee 」す崎

・「 \vee 」ふり×

(60)×18×4 039

(12) 「 \vee 」□

(87)×(25)×(17) 081

中央部整地層

(13) ・「こめ入」□

・「四郎右衛門」□

79×14×3 061

八 OS八八―一三三調査

(1) ・「 \vee 」越^{〔後カ〕}屋兵衛□様

・「 \vee 」□元作

128×28×6 032

今回報告した木簡・墨書木製品の出土地は大坂城跡の各地にわたるうえ、その年代も豊臣氏大坂城期から徳川氏大坂城期のものまで含んでいる。そこで、今回報告した木簡・墨書木製品が、大坂城跡出土の木簡のなかでどう位置づけられるかを簡単にまとめておきたい。近年の大坂城跡の調査では、一現場から数点の木簡が出土する例が増えてきた。このことは木簡が中世末から近世にかけて多く利用されていたことを示すと考えられる。ただ、豊臣氏大坂城期(一五八三～一六一五年)の木簡出土例に比べて、徳川氏大坂城期の木簡の出土例は少い。これは、発掘調査の対象が、大坂夏の陣(一六一五年)

の焼土層からであることと関係するといえる。したがって、徳川氏大坂城期の木簡と豊臣氏大坂城期の木簡との差異といった点はまだまだ不明である。

今回報告した木簡の内、豊臣氏大坂城期のものは、OS八九―九〇次の三点、OS八八―一二一次の一点、OS八九―一九次の(1)の一点、OS八八―八八次の一三点、OS八八―一一三次の一点である。OS八八―八八次の(9)(12)を除くすべてが荷札木簡と考えてよいものである。荷札が付けられていた物品が明らかなのは少いが、「こちまなすし」「くぎあさつけ」「柿」「ふり」「こめ」がある。これまでに出土した豊臣氏大坂城跡の木簡は、船場の魚市場の木簡『木簡研究』九号参照)、惣構内出土の魚名の木簡『木簡研究』一〇号参照)を除けば同一種類の物品のみの木簡が出土する例はなく、種々の物品に付けられた荷札木簡が少量出土するのが一般的である。今回報告した例は、いずれも大坂城跡で一般的な木簡の出土のあり方といえよう。

また、木簡の記載内容を見ると、表裏にまったく同じ内容を記した例(OS八九―九〇次(2)、OS八八―八八次(2))がある。同様な例は、魚市場木簡『木簡研究』九号・一〇号)にもみられ、一つの荷物に複数の木簡が付けられていたのではないかと考えている。

徳川氏大坂城期の木簡・墨書木製品はOS八九―八九次、NW八八―一次、OS八九―一九次(2)(3)、OS八九―四一次で出土した。OS八九―四一次出土の木簡は付札と考えられるが、豊臣氏大坂城

期の木簡にはほとんど例をみない形態である。また、NW八八―一次の木簡等は屋敷の性格が判明している場所での出土であり、さらに記された人物を文献でたどることができた稀な例である。徳川氏大坂城期の木簡の出土例は、先述したような条件から多くはないが、豊臣氏大坂城期に多い荷札木簡が少くなり、家財や容器に所有者が記録したものや、商品の名を容器に記した例などが多くなるようである。数少ない資料のため今後の資料の増加をまって検討すべきであろう。

釈文については大阪城天守閣の渡辺武・内田九州男・北川央の各氏から御教示を得た。

9 関係文献

森 毅「江戸時代城代家臣屋敷出土の墨書木製品」『葦火』二〇号
 大阪府文化財協会 一九八九年

大阪府文化財協会『難波宮跡・大坂城跡発掘調査中間報告』
 大阪府文化財協会 一九八九年

鈴木秀典『生玉大明神』と墨書された木箱』『葦火』二五号 大阪府文化財協会 一九九〇年

第27回埋蔵文化財研究集会資料『中世末から近世のまち・むらと都市』(一九九〇年)

- | | | | | | |
|---|-------|----|-----------|-----|------|
| 一 | 宮本佐知子 | 二 | 南 秀雄 | 三・七 | 黒田慶二 |
| 四 | 森 毅 | 五 | 鈴木秀典 | 六 | 伊藤 純 |
| 八 | 松尾信裕 | 釈文 | 中川信作・鳥居信子 | | |

